Ⅲ　授業計画表（シラバス）
ー修士課程ー

授業科目名	複合芸術論	担当教員名	科目責任者：岩井成昭 小田英之、今中隆介、尾登誠一、 岸健太、飯倉宏治、藤浩志、 志邨匠子、服部浩之、萩原健一、 白杉悦雄、唐澤太輔、石倉敏明
授業科目区分	複合芸術科目		
履修区分	必修科目	授業形態	講義　（オムニバス・共同）
配当年次・学期	1 年次前期	単位数	２単位

授業の到達目標及びテーマ

本授業は、今後展開させていく「複合芸術」の理論構築に向けて、本研究科の所属教員全員がオムニバスで、それぞれの専門性を背景にした「複合性」を解説・提案していく。元来「芸術」は異分野との影響関係や異文化相互の交流を背景に「複合」しながら進化し続けて来た。本大学院の基盤となる学部教育においては、既に５専攻の領域横断と専門の異なる教員のグループ指導が自主制作における発想を広げるなどの成果を上げつつある。この学部からの連続性を踏まえて本授業では、「地域性と文化的視点の複合」「研究領域の複合」「スキル／方法論の複合」「複合的パートナーとのコラボレーション」「表現を通した未来像の複合」等の具体的な状況設定を通してアートやデザイン、批評といった領域の役割や諸条件を理解し、学生自らの研究領域を軸とした「複合芸術」への道筋を示す。こうして獲得された「複合芸術」に対する期待と課題は、同期間に平行して開講される「複合芸術演習」とリンクしながら実践され、学生の生きた経験として体得されることが望まれる。

授業の概要

本授業では、複合芸術表現を探求・実践する上での論点を確認し、芸術史上で先行する複合表現として、ポストモダン、マルチカルチュラリズム、プルーラリズム等を背景としたハイブリッドアートやコンポジットデザインなど他領域との横断、複合することで生まれる新たな芸術思想や形状を紹介する。そして特定地域でプロジェクトを企画し運営していくために有効な複合的な視点やリレーショナル・アート、ソーシャリー・エンゲージド・アート等、一つのメディアや技法に捕らわれないことが一因となり、より現代的な課題に対応可能になった表現を学ぶ。次に、美学、人類学、プロダクトデザイン、情報デザイン、アーバンスタディー、美術史・批評、それぞれの領域から「複合芸術」という概念について、否定的な見解も含めてどのような機能と展望が見出されるのかを解説していく。これらの講義と議論を通して複合芸術表現への理解を深めていく。

授業計画

※以下の講義テーマは共通して「複合芸術」との関連を前提とする。

第 1 回「オリエンテーション」（岩井成昭）

現代の文化・芸術表現においては「基底文化、様式、素材、メディア、観客参加、社会包摂」など、さまざま要素が複合化の様相を呈している。この回では、事物の成立に作用する複合性について考察し、以降につづく本授業の指標とする。

第 2 回「多様性と共存の諸問題」（岩井成昭）

近年世界各地の多文化状況において顕在化する文化現象について、それらがどのような目的と機能を持ち、どのような影響を社会と芸術自体に与えているのかを考察する。

第 3 回「ビジュアルアート」（小田英之）

視覚芸術における「複合」について絵画を軸に多様な観点から考察する。

第 4 回「映像表現」（萩原健一）
　光学機器を主とした映像メディア環境の変遷を辿りながら、共に変容していく人間の思考や振る舞いについて考察する。
第 5 回「美術史」（志邨匠子）
　西洋美術史学の方法論を歴史的に概観し、多角的・複合的な議論のあり方を解説する。また日本の美術史学については、近年の動向も含め、問題点を考察する。
第 6 回「芸術人類学」（石倉敏明）
　国内外のフィールドにおけるいくつかの調査・表現活動の実践例に基づき、現代の芸術活動にとって参照項となる歴史と神話の関係性を考察する。
第 7 回「ひらめきと創造的活動のプロセス」（唐澤太輔）
　南方熊楠の「やりあて」という概念をめぐって、人間によるひらめきと創造的活動のプロセスを哲学及び文化人類学を応用しながら解説する。人類が生み出してきた民俗・文化・宗教の根底にある精神構造を探求する。
第 8 回「美学」（白杉悦雄）
　欧米の哲学者、美術史家のテキストを参照しながら、なぜ複合の視点が必要なのか、について考察する。
第 9 回「自然観と生命観」（尾登誠一）
　デザインの中心・重心・核心を中庸な支点として捉え、モノとコトのありようを自然観や生命観を包含する関係学上で凝視し、複合芸術におけるデザインのリゾウム的展開（横断性・越境性）を概観する。
第 10 回「プロダクトデザイン（今中隆介）
　生物が適応していく条件としての環境の磁場を理解しながら、地域の場所性（ローカリティ）からどのような要素をデザインに活かすべきかを複合的な視点から解説する。
第 11 回「論理および情報科学」（飯倉宏治）
　複数分野に存在する同様の問題を見抜く等、感性のみでは探求しきれない領域が存在する。論理的思考の基礎と、知っておくべき情報システムの構造についても解説する。
第 12 回「都市空間の公共と私有」（岸健太）
　都市社会環境において生成されるさまざまな「オーナーシップ（所有権）」の概念と「中間領域」を都市の複合性という視点から解説する。
第 13 回「アートマネジメントの構造」（藤浩志）
　既存の表現を社会に問うだけではなく、社会へ関与する方法そのものを開発し表現とするアートの生成を例にとって、アートマネジメントの構造を解説していく。
第 14 回「キューレーションの領域」（服部浩之）
　アートマネジメントの役割において特にキューレーションにフォーカスすることで、展覧会や文化事業が作りだすメッセージを享受する対象としての鑑賞者の存在と、歴史を編纂するという学術的な影響力について考える。
第 15 回　まとめ（岩井成昭）
　社会生活における美術・デザインの位置付けが複合的な視点・思考により、どのように変化して来たのかを振返りながらまとめ、教場レポートを作成する。

履修上の注意

テキスト

担当各教員がテキストを適宜配布する。

参考書・参考資料等
授業に応じて適宜紹介する。
学生に対する評価
出席　50%　　レポート　50%

授業科目名	複合芸術応用論Ａ	担当教員名	科目責任者：服部浩之 藤浩志、岩井成昭、岸健太
授業科目区分	複合芸術科目		
履修区分	選択必修	授業形態	講義　（オムニバス・共同）
配当年次・学期	1 年次後期	単位数	２単位

授業の到達目標及びテーマ

複合芸術としてのアートマネジメントを学ぶために、さまざまな文化・芸術活動がどのような動機からいかなる資金を得て、施設及び組織を運営し活動しているのかを知り、芸術が社会に存在しうるための仕組みを学ぶ。また、全国で実施されている特徴ある文化施設や芸術祭などを選び出し、複合芸術に対応するための運営という視点から、ケーススタディとして比較分析し、その目的や条件、環境などに合わせた幅広い企画、運営、評価の方法を理解する。

授業の概要

本授業では、はじめに社会における芸術の窓口とも言える文化施設や組織の運営形態、(美術館、ギャラリー、芸術祭、地域プロジェクト等)を実際に訪問し、現状を学ぶところからスタートする。それを踏まえて、複合的な芸術表現やそのようなテーマで企画される展覧会などの文化事業について、様々なケーススタディをする。そして、それぞれ実質的な運営に必要な企画・立案、資金調達・会計、運営管理、広報とアーカイブ、といった複合的な役割の意味とスキルを知る。こうして実際の運営現場で役立つための準備を万全に整えておく。

授業計画

第１回　ガイダンス

第２～６回　地域の文化芸術拠点調査（美術館・アートセンター・市民活動のフィールドワーク）

芸術文化活動が盛んな青森県の文化施設を訪れる。青森市、弘前市、十和田市、八戸市の文化芸術機関を訪れ、美術館やアートセンターとまちの結びつきや、マネジメント現場を知る。

第７～８回　アートプロジェクトの背景の研究

主に日本のアートプロジェクトの歴史を網羅的に学ぶ。

第９～１０回　プロジェクト企画作成の研究

プロジェクトの企画立案について研究する。

第１１～１２回　プロジェクト企画作成の研究２

プロジェクトの交渉や広報などについて研究する。

第１３～１４回　観客と参加に関する研究

プロジェクトの対象は誰か、どのような参加の可能性があるか、具体的事例を交えて研究する。

第１５回　総括

プロジェクトをいかに記録しアーカイブするかを、各自の実践を交えて総括として検証する。

履修上の注意

フィールドワークの際に、旅費など実費が発生する可能性がある。

テキスト

教員が作成したテキストを適宜配布する。

参考書・参考資料等

授業に応じて適宜紹介する。

学生に対する評価

授業への取り組み　50%　　レポート　50%

授業科目名	複合芸術応用論Ｂ	担当教員名	科目責任者：尾登誠一 飯倉宏治、萩原健一、小田英之、 永原康史、今中隆介（、外部講師）
授業科目区分	複合芸術科目		
履修区分	選択必修	授業形態	講義（オムニバス・共同）
配当年次・学期	１年次後期	単位数	２単位

授業の到達目標及びテーマ

授業では、デザインをベースに社会（地域）の様々な問題に対して複合的に解決や提案を試みるための手掛かりとして、デザイン手法（グラフィックデザイン、プロダクトデザイン、情報デザインなど）とその考え方について社会的手法を抽出し理解を深める。また、シンギュラリティの到来もささやかれる昨今、さらに高度化する情報社会を見据えて、関連するテクノロジー（情報）や映像手法を交えた複合的な視点に立ち、デザインや美術、テクノロジー、社会、思想といった様々な要素がレイヤー化されるソーシャルデザインとその実践の新たな地平を展望する。

授業の概要

授業でははじめに、デザインにおける複合的な試みを事例に、複合的なデザインの思考・方法論をプロダクトデザイン及びビジュアルコミュニケーションの視点から紐解いていく。加えて、人工知能と発展する情報技術の先端的な知識を紹介。同様に、現代社会における映像技術の発展とその役割について解説する。さらに、それらの理解を基にしたソーシャルデザインの実践に向けて、より広く社会の問題解決に繋げる可能性を提示していくほか、それらの活動を具体化する選択肢としての起業及び法人設立などの実践的な方法論等を 5 人の教員によるオムニバス・共同形式の講義として行う。

授業計画

第１回「デザインコンプレックス」デザインにおける複合とは何か（尾登誠一）

デザインが果たしてきた社会的役割についてプロダクトデザイン、グラフィックデザインなどの複合的なデザイン事例を紐解きながら、ソーシャルデザインをはじめとするデザインの複合性を再考する。

第２回「３つのＭＡの解釈」プロダクトデザインの立場から（尾登誠一）

空間・時間・人間に共通する間(ＭＡ)の概念から、モノとコトのありようをデザイン思考に定位させ、地域の場所性（ローカリティ）からどのような要素をデザインに活かすべきかの応用展開を探る。

第３回「ソーシャルデザイン」他者連携のありよう（尾登誠一）

「デザインは世界が抱える問題を解決できるのか」という問いをトピックに、デザイン実践を複合的視点から紐解き、社会性との「連携性」「参加性」「協働性」を考察しつつ、問題提起と新価値創造の方向性を探索していく。

第 4 回～7 回「デザイン 2」ビジュアルデザインの視点（永原康史）

グラフィックデザインやインフォメーションデザインが世界に答えてきたこと、その思想を踏まえソーシャルデザインとしての方向性や方法論を示す。

第8回～10回「テクノロジー」（飯倉宏治（／外部講師））

パラダイム・シフトという視点を通じ、我々人間の感情と各種の技術や技法の間に存在する関係を論じる。また、技術がもたらす質的な変化や法則等についても題材とし、美術・デザインにおけ

る技術の役割について考察を行う。

第 11 回～13 回「スモールオフィス・ベンチャー・NPO」（飯倉宏治／今中隆介）

「起業を考えたときに知っておくべき事柄について」「事業にまつわる各種の事務処理について」等を題材として授業を進める。実際に事業を営む場合、さまざまな事務処理が発生する。商習慣に関連する書類を紹介し、実際の事務処理についても解説を行う。

第 14 回～15 回「写真・映像技術の進化」（萩原健一／小田英之）

急速に進化する写真／映像の撮影・編集環境の中で、社会とどう関わることができるのか、写真は人をどう変えたかを、変容する映像・壊れる映像等に関する作例を通じてその技術と可能性について論じる。

履修上の注意

配布資料のほか、適宜映像資料を使用します。なお、新しい研究成果を授業に反映させるため、各回の内容や順番を変更することがあります。

テキスト

教員が作成したテキスト適宜配布する。

参考書・参考資料等

D.A.ノーマン『複雑さと共に暮らす』、アンソニー・ダン『スペキュラティブ・デザイン』、永原康史『インフォグラフィックスの潮流』、アネミック.ファン.ブイエン他『デザイン思考の教科書』などの他、授業で適宜紹介する。

学生に対する評価

授業への取り組み　30%　　レポート　70%

授業科目名	複合芸術応用論Ｃ	担当教員名	科目責任者：石倉敏明 志邨匠子、白杉悦雄、唐澤太輔
授業科目区分	複合芸術科目		
履修区分	選択必修	授業形態	講義（オムニバス・共同）
配当年次・学期	1 年次後期	単位数	２単位

授業の到達目標及びテーマ

21 世紀の諸芸術は、自然と文化（人工物）が密接に絡み合った同時代の現実に晒され、異質な価値観の交錯の中から新たな創造的活動を生み出し続けている。本講義では芸術実践の研究と人文諸科学の研究方法を組み合わせることによって、いわば「美術」という制度の内側と外側からこうした創造性の来歴を問うものである。過去・現在・未来の時間軸を往還しつつ、人間性の境界を越えて人々に大きな影響を与える様々な潮流についての理解を深め、人間中心主義を超えて生成する新たな「複合芸術」の表現可能性を探究する。

授業の概要

本授業では現代の芸術実践と関わりのある様々な分野のテキストを取り上げ、各回の発表担当者がこれを読み込むことで、テキストに関連する幅広い領域の知識を深め、発表によってこの知識を他の参加者と共有する。受講者は各回の主題に応じたテキストを精読し、さらにその内容を踏まえたレポートを書くことが求められる。検討するテキストは美術史、芸術学、人類学、科学哲学、フェミニズム、生物学、宗教学、深層心理学等の諸領域から適宜選択する。

授業計画

第１回　ガイダンス

現在、我々が直面する「複数の自然と文化」「デジタル時代の他者性」「異なる超越性の調停」「人間的なるものを越えた視野」等の問題は、いったい何を意味するのか。一連の講義の前提となる「複合芸術」という概念を明らかにした上で、様々な技術や知を横断する芸術活動のあり方について詳述する。

第２回～３回「現代の芸術実践について」

クレア・ビショップ、ボリス・グロイス、カール・ベッカー等の現代の芸術研究を輪読することにより、「社会的転回」及び「関係論的転回」と呼ばれる現代芸術の構造的変化についての理解を深め、その課題と可能性について考察する。

第４回～６回「普遍性の基盤とその外縁」

クロード・レヴィ＝ストロース、南方熊楠、河合隼雄、C.G.ユングの著作を比較することによって、芸術活動の基盤となる心的構造の普遍性とその個性化の諸様態についての理解を深め、とりわけ宗教や超越性に関する人文諸科学の探求によって拡張される芸術実践の可能性を考察する。

第７回～９回「共通世界の構築」

ブリュノ・ラトゥールや中沢新一による対称性人類学、エドゥアルド・コーンやレーン・ウィラースレフによる「複数種の人類学」を参照しつつ、「人間を超えたもの(more than human)」に対する知的・感覚的態度や、人間と非人間による共通世界の構築という課題について探究する。

第１０回～１１回「新たに見出された性と自然」

美術史におけるヌードと肉体表象を通して、性愛や欲望のコードがどのように視覚化されてきたのかという問題を、西洋美術、日本美術の両方の事例をあげ、多角的に考察する。またジェンダー人類学や

フェミニズムの観点から、「自然と文化」の二項対立を超えた性と自然の認識について考察する。

第１２回～１３回「他者性と出会う芸術」
　美術の領域において、「敵」はいかに表象されてきたのか、ジョン・ダワーなどの著作を手がかりに、特に太平洋戦争期の事例を取り上げる。さらに「西洋/非西洋」「支配/被支配」へ議論を展開し、エドワード・サイード等のポストコロニアリズムを前提にした現代美術の動向について考察する。

第１４回～１５回「複合芸術の次元をひらく」
　超越性と偶像性をめぐるイメージ人類学の事例を通して、知覚不能なものを知覚可能なものに（あるいはその逆に）変容させる技術としての芸術実践について探究する。また、エドワード・レルフやマルク・オジェによる空間人類学的研究を参照しながら、「場所性」と「非場所性」という二つの原理が併存する現代の空間経験について考察し、同時代に生起しつつある「複合芸術」の具体的な表現形態について多角的に探究する。

履修上の注意

各回の内容や順番を変更することがあります。

テキスト

各回のテキストは適宜配布します。

参考書・参考資料等

C.レヴィ＝ストロース『野生の思考』、B.ラトゥール『「虚構」の近代』、クレア・ビショップ『人工地獄』、エドワード・サイード『オリエンタリズム』、マルク・オジェ『非場所』などの他、授業で適宜紹介する。

学生に対する評価

授業内の発表と議論への参加　60%　レポート　40%

授業科目名	複合芸術演習	担当教員名	科目責任者：小田英之 岩井成昭、今中隆介、尾登誠一、 岸健太、飯倉宏治、藤浩志、志邨匠子、 服部浩之、萩原健一、白杉悦雄、 唐澤太輔、石倉敏明
授業科目区分	複合芸術実践科目		
履修区分	必修	授業形態	演習（オムニバス・共同）
配当年次・学期	1 年次前期	単位数	６単位

授業の到達目標及びテーマ

複雑に変化する社会の流れに対応しうるスキルの習得は、複合芸術を研究・制作するうえでの基盤といえる。修士課程は、最終的に自身が選択する専門性を軸に、さまざまな領域横断的な関係性を検証し、拡張と交換という展開性を必然付ける。授業は、現代芸術／デザイン／情報科学／アートマネジメント／アートライティングなどを構成する要素を複合的に組み合わせた芸術諸分野の研究や、作品制作に不可欠な汎用性・応用性の高い知識とスキルを演習の中で集中的に学び複合芸術を俯瞰することを目標とする。授業では、社会や環境、或いは芸術それ自体から発露する表現の根拠を見出し、各自が自己表現しつつその成果を分析し持続・発展させることを指向させ、複合的領域横断から生まれる新領域創造への可能性を概観することをテーマとしている。

授業の概要

この授業は、社会に対応しうる実践的かつ、芸術における幅広い視野を持ちながら特別研究に導入していくためのさまざまな芸術領域から抽出したスキルを集中的かつ複合的に学ぶ演習である。とりわけ以下４つの手法に関するスキルを得ることを奨励する；１「調査研究手法」として地域と場所性を調査し関係性を構築するスキル。２「表現技術手法」として、クリエイティブなアイデアを具体的なメディアを通して具現化させるスキル、３「成果発信手法」として、情報の発信・受信機能を理解しながら活用するスキル。４「企画具体化手法」として、社会に向けた有効性を検証するためのワークショップを開発するスキル。これらの習得を目標として、概ね１～２週間単位の８つに及ぶ技術演習を連続して実施する。それぞれの演習は専門技術ごとの教員が単独または複数で担当し、学生はその演習構成の特徴に合わせて、共同または個人で与えられた共通テーマに取組む。中でも「地域研究」「ワークショップ開発Ⅰ」「ワークショップ開発Ⅱ」等では、受講者の共同作業が予定されているが、これらの演習プロセスにおいて、学生が企画運営者、表現者、研究者などそれぞれ別の立場から課題にあたることから、表現の諸相、複数の社会的座標における経験の共有も目論まれている。

授業計画

第１回～6 回**「地域プロジェクト批評」**（服部浩之／藤浩志）

国内における地域プロジェクトの概要紹介の後、履修生は既存の特定地域プロジェクトを一つ選択し、それぞれのテーマで分析し、ディスカッションで理解を深める。「複合芸術応用A」（後期）に向けた導入的な演習であり、相互に学習効果を上げるプログラムを形成している。

第 7 回～12 回**「地域研究」**（岸健太／岩井成昭／石倉敏明）

初めに地域研究の手法の違いを理解するために、アート的手法、建築的手法、民俗学的手法、社会学及び文化人類学的な手法がアート及びデザインにどのように活かされているかを理解する。次に履修生は特定のテーマを探し出し、任意の地域においてフィールドワークを行い、それぞれの調査結果と自身のテーマに基付き同地域とどのような関係を築けるのかをまとめ、プレゼンテーションする。

第 13 回～16 回**「総合デザイン」**（尾登誠一／今中隆介）

自然と人工物、生活デザイン、インプルーブメントという価値基準、機能研究をベースにデザインの意味を多角的に知るワークショップ。「複合芸術実習Ⅱ」におけるソーシャルデザインの多様性をこの演習で理解しておく。

第 17 回～28 回**「インタラクションデザイン」**（萩原健一／小田英之／飯倉宏治）

人間と外部を結びつけるインタラクティブな装置の制作を行い、コンピューターを用いた様々な「入力・出力」について学ぶ。電子工作、映像、プログラミング等を扱い、物理空間と情報空間との接点および体験について実践的に考察し、今後の研究活動に活用できる基礎的な能力を身につける。

第 29 回～36 回**「プロトタイピングメソッド」**（飯倉宏治／今中隆介／尾登誠一）

さまざまな発想をデジタル・プロトタイピングとして 3D プリンター等を使用し実体化することを検証する。工芸とプロダクト、アートとの領域横断的な思考や商品開発など多様な展開を前提に実習を行うことで、構想の広がりを目指す。

第 37 回～44 回**「言語表現・アートライティング」**（志邨匠子／服部浩之／白杉悦雄／唐澤太輔）

作品や展覧会をはじめ、発想や事象の記述方法、理論の組立、リファレンス、批評などテキストを使った実践を行う。「複合芸術応用論C」履修者、及び「特別研究」において論文による研究を選択する者だけでなく、「複合芸術実習Ⅰ、Ⅱ」における企画意図や評価報告などにも応用できる執筆・構成・編集の演習を行う。

第 45 回～52 回**「ワークショップ開発Ⅰ」**（岸健太／萩原健一／岩井成昭）

国内におけるアート・ワークショップの成立過程を踏まえながら、表現の領域横断や拡張、表現者自身のスキルアップを目的においた実験的ワークショップの考案および実践方法の開発。「複合芸術実習Ⅰ」のプロセスやリサーチの手法としても組み込むことができる汎用性の高いワークショップの技術を演習によって学ぶ。

第 53 回～60 回**「ワークショップ開発Ⅱ」**（尾登誠一／藤浩志）

ソーシャルデザインの現場や、ソーシャリー・エンゲィジド・アートにおける社会的なニーズに応答するアウトリーチ型ワークショップの考案および実践方法の開発。「複合芸術実習Ⅱ」のプロセスやリサーチの手法としても組み込める汎用性の高いワークショップの技術を演習によって学ぶ。

（4 コマ／週×１５週）

履修上の注意

材料費等実費を徴収することがある。

テキスト

必要なテキストは適宜配布。

参考書・参考資料等

授業で適宜紹介する。

学生に対する評価

プロジェクトの妥当性、作品や調査の成果およびそれぞれのプロセスにおける取り組みなど、各技術演習の担当教員による評価を集計し総合的に評価する。

授業科目名	複合芸術実習Ⅰ	担当教員名	科目責任者：岸健太 岩井成昭、服部浩之、藤浩志
授業科目区分	複合芸術実践科目		
履修区分	選択必修	授業形態	実習　共同
配当年次・学期	１年次後期	単位数	２単位

授業の到達目標及びテーマ

「複合芸術演習」で学んだ領域横断から生まれる未知の芸術への可能性、表現の社会的自立と環境を分析する能力の複合的獲得を目指して、実際に学外に出向き「アウトリーチ型プロジェクト（※）」を実施する。本実習は、個人の活動により独自性の高い調査や研究プロジェクトを実施し、複合芸術の創造性と可能性を確認することを目標とする。

（※）地域共同体、行政組織、民間企業、非営利団体、市民団体、研究教育機関などの学外組織を協働者（カウンターパート）とした「社会的な実践」として行われるプロジェクト。

授業の概要

本実習では、アート領域の活動であることを前提として、それぞれの学生が自身の研究計画によって独自のテーマ性と社会性を適切に担保してテーマを設定する。実習の外部パートナー（行政組織／民間企業／非営利団体／市民団体／教育施設／等）については、学生自らがテーマに適応した組織や企業を選出し、企画提案・交渉を行うことが課せられる。ただし、民間企業との協働については、外部企業による本学への支援組織である「アキビネット」等を通しての選定依頼が可能である。

[本実習でおこなう活動の内容例]
地域課題に応答するプロジェクトの実施及び運営、地域研究に基づく作品制作と展覧会の実施、ローカルメディアとの共同制作、社会介入作品の制作、アーティスト・イン・レジデンスの企画運営、ワークショップの企画や実施、など。また研究系では、情報紙や記録集の編集・執筆。関連するテーマについての文献研究と論文執筆、テキストによるアートプロジェクトの実施、などが想定される。

本実習での活動は個人研究として取り組まれる必要があるが、内容と提案により担当教員との話し合いを経た上でグループワークとすることも可とする。また、研究テーマ自体が「社会的」である必要はないが、調査のプロセスや成果発表の機会を社会からの「アクセスポイント」として機能させることを試みる点が本実習の特色である。この「アクセスポイント」とは、学外の市民・社会が各学生の研究プロセスと成果に直接的に触れることができる「公共的なプレゼンテーションの仕組み」を指す。本実習における指導は、受講生が将来的に取り組む可能性のある地域活動のための組織（非営利団体、企業、市民団体など）の設立も視野に入れおこなわれる。

授業計画

第 1 回～ 8 回：＜実習テーマの設定、企画構想＞
プロジェクトの実施対象、利害関係者（ステークホルダー）の分析、協働者（カウンターパート）の確保をおこなう。
第 9 回～16 回：＜企画案のプレゼンテーションと全員参加のディスカッション＞
第 17 回～24 回：＜プロジェクト及び作品制作の実施計画書・広報資料等の作成＞
第 25 回～32 回：＜事業（プロジェクト／制作／調査）実施＞
プロジェクトに「アクセスポイント」の実現が考慮されているかを検証する。
第 33 回～40 回：＜事業（プロジェクト／制作／調査）実施
学内進捗報告１
第 41 回～48 回：＜事業（プロジェクト／制作／調査）実施＞

第 49 回～52 回：＜事業（プロジェクト／制作／調査）実施 学内進捗報告２ 第 53 回～56 回：＜事業（プロジェクト／制作／調査）実施＞ それぞれの「アクセスポイント」が機能しているかを検証する。 第 57 回～60 回：＜実施報告と全体評価＞ 最終報告 特別研究への連結についても併せて報告する
履修上の注意 特になし
テキスト 教員が作成したテキストを適宜配布する。
参考書・参考資料等 授業で適宜紹介する。
学生に対する評価 授業（プロジェクト）への取り組み　40%　　課題の成果　60%

授業科目名	複合芸術実習Ⅱ	担当教員名	科目責任者：今中隆介、 尾登誠一、飯倉宏治、小田英之、 萩原健一
授業科目区分	複合芸術実践科目		
履修区分	選択必修	授業形態	実習　共同
配当年次・学期	1 年次後期	単位数	２単位

授業の到達目標及びテーマ

複合芸術演習で習得したスキル及び領域横断から生まれる新領域創造の可能性と、表現の社会的自立に必要なマネジメント感覚、また地域から学ぶフィールドワークやその分析能力を身につけつつ社会に向けて応用展開できるデザイン力を養う。学外組織との連携実践を設定し、デザイン（プロダクト・環境・情報・ビジュアルなど）によって身近な社会問題の解決を試みるプロジェクトとして、「ソーシャル･デザイン」による社会デザイン能力の拡張と交換をテーマに、具体的な制作・提案を行う。その際、ファブリケーションや IT、映像など、多様なスキルやメディアを複合的、効果的に使用することを試みる。

授業の概要

本演習はグループワークが基本であり、これをプロジェクトの運営組織と考える。履修生はお互いの動機の共有に始まり、実際にプロジェクトを構想、実施、評価・検証するために必要なさまざまなステップを踏む。また、全体の運営プロセスを理解したうえで自身の方向性を生かしながら分業を受け入れることで、事業プロセスにおける役割分担と共有方法、現場におけるデザインの諸機能を学習する。

授業計画

第１回～８回　**「リサーチ」**
デザインのリサーチ方法により地域社会をテーマとしたプロジェクト案を作成する。ソーシャルデザイン、プロジェクト運営に必要な組織形態を検討し構築する。

第９回～16 回　**「動機の共有とテーマ設定／組織図の制作」**
調査結果を踏まえて、プロジェクトのテーマ設定と企画立案を行う。連携する学外組織との交渉を進め、運営に向けた計画と組織を構築する。

第 17 回～24 回　**「プロジェクト運営１」**
設定されたテーマを踏まえ、提案型の作品やプロダクト制作（プロトタイプ）、ワークショップなど任意のメディア形式による制作・活動を実施するとともに、最終的なアウトプットを踏まえた記録や広報などの手法についても計画・検討する。

第 25 回～36 回　**「プロジェクト運営２／中間報告」**
プロジェクトの進捗状況を履修生と指導教員、外部関係者等全員で確認し合いながら、必要な軌道修正や追加処置を行なう。

第 37 回～44 回　**「プロジェクト運営３」**
運営段階の推移によってそれぞれ行なうべき広報や記録の進行を確認しつつメインのプロジェクトを実施、完了させる。

第 45 回～48 回　**「プレゼンテーションと内部評価」**
プロジェクトの全容を学内と連携外部組織双方にてプレゼンテーションをする。プロジェクトがどのようなプロセスを経てどのような結果を導いたのか、関係者に報告し、内部的な評価を集める。

第 49 回～52 回　**「フィードバックと外部評価」**
プロジェクトの結果を踏まえ、テーマ的には芸術的、社会的な視点、実践としては組織内部及び外部からの視点、それぞれから成果の意義に関する検証・評価を行う。

第 53 回～60 回	**「アーカイブの作成」** プロジェクトのプロセスと成果を踏まえて、グループ及び役割分担がある運営組織の中で、個人としてどれだけ機能していたかを検証できるようなアーカイブを作成し、今後の活動に生かす。
履修上の注意 特になし	
テキスト 教員が作成したテキストを適宜配布する。	
参考書・参考資料等 村田智明『ソーシャルデザインの教科書』、筧裕介『人口減少×デザイン』、ジュリア・カセム（著，編集），平井康之（著，編集）他『インクルーシブデザイン：社会の課題を解決する参加型デザイン』などの他、授業で適宜紹介する。	
学生に対する評価 授業への取り組み　40%　　プロジェクトでの役割および成果　60%	

授業科目名	制作技術演習Ⅰ	担当教員名	小田英之、他担当教員
授業科目区分	制作技術演習科目		
履修区分	必修	授業形態	演習
配当年次・学期	1 年次通年	単位数	2 単位

授業の到達目標及びテーマ

修士課程の１年次に行われる本授業では、学生の研究に求められる専門性の高度化に応えるため、自らが作成した研究計画に基づき、制作・研究に関わる高度な技術・知識を学びながら、複合的な表現や視点を得るために習得することを目標とする。

授業の概要

本授業は履修者の特別研究のテーマに基づき、関連分野から担当教員を選択するが、個々の技量に応じて、それぞれ異なる目的と水準が求められることから、担当教員と研究に必要な技術や知識に関する具体的な協議を行い、その結果を踏まえて授業計画を定めたうえで進められる。その過程では、１年次の履修科目である複合芸術演習や複合芸術実習などの中で得られた気づきや経験を踏まえて、各領域を専門とする担当教員のもとで、履修者自らが技術・技法の向上に向けた研鑽を行うこととなる。担当教員は履修者の自主性を重視しながら必要に応じて、適宜技術取得の助言や方法を示す。

なお、本演習分野の初学者には、科目選択時の面談を介して希望に応じた個別指導を行う環境を整えるなどする。制作及び研究の内容を十分理解できるようにするほか、履修者の研究指導教員が本演習での学びを複合的に研究成果へ転用できるよう特別研究科目の中で助言指導を行う。

授業計画

第１回～２回　学生自身の特別研究テーマの方向に合わせ、目的に応じた学びの計画を担当教員と相談の上作成する。
第３回～６回 必要となる素材・手法や技術・知識の習得法を探る。第
７回～10 回 必要となる素材・手法や技術・知識の習得法を試す。第
11 回～15 回 必要となる素材・手法や技術・知識を習得する。
(1 コマ×隔週 15 回)

履修上の注意

他担当教員については別紙にてオリエンテーションで示す。自身の研究・制作テーマに向けた目標を定め、自主性を持って取り組むことが求められる。

テキスト

教員が作成したテキストを適宜配布する。

参考書・参考資料等

必要に応じて適宜個別に指示する。

学生に対する評価

実習への取り組み　40%　　研究計画に基づく目標の達成度　60%

授業科目名	制作技術演習Ⅱ	担当教員名	小田英之、他担当教員
授業科目区分	制作技術演習科目		
履修区分	選択	授業形態	演習
配当年次・学期	2 年次通年	単位数	２単位

授業の到達目標及びテーマ

修士課程の２年次に行われる本授業では、学生の特別研究に沿った専門性に応えるため、１年次の学びを踏まえて自らが作成した研究計画に基づき、制作・研究に関わる高度な技術・知識を学びながら、複合的な表現へ応用することを目標とする。

授業の概要

本授業は履修者の特別研究のテーマに基づき、関連分野から担当教員を選択するが、個々の技量に応じて、それぞれ異なる目的と水準が求められることから、担当教員と研究の深化に必要な技術や知識に関する具体的な協議を行い、その結果を踏まえて授業計画を定めたうえで進められる。そして各領域を専門とする担当教員のもとで、修了研究の完成に向けて、履修者自らが技術・技法の高度化と深化に向けた研鑽を行うこととなる。担当教員は履修者の自主性を重視しながら必要に応じて、適宜技術取得の助言や方法を示す。

なお、本学学部の専門分野を基礎に置かない履修者には、１年次に引き続き個々に合った指導内容を整えるほか、当該履修者が本演習での学びを複合的研究として結実できるよう研究指導教員が特別研究科目の中で助言指導を行うなど、教員間の連携により学修を支援できる体制とする。

授業計画

第１回～２回　履修者の特別研究テーマの方向に合わせ、目的に応じた学びの計画を担当教員と相談の上作成する。
第３回～６回 必要となる素材・手法や技術・知識の応用法を探る。第
７回～10 回 必要となる素材・手法や技術・知識の応用法を試す。第
11 回～15 回 必要となる素材・手法や技術・知識を応用する。
(1 コマ×隔週 15 回)

履修上の注意

他担当教員については別紙にてオリエンテーションで示す。自身の研究・制作テーマに向けた目標を定め、自主性を持って取り組むことが求められる。

テキスト

教員が作成したテキストを適宜配布する。

参考書・参考資料等

必要に応じて適宜個別に指示する。

学生に対する評価

実習への取り組み　40%　　研究計画に基づく目標の達成度　60%

授業科目名	特別研究Ⅰ	担当教員名	尾登誠一、小田英之、藤浩志、岩井成昭、今中隆介、志邨匠子、岸健太、飯倉宏治、服部浩之、萩原健一、白杉悦雄、唐澤太輔、石倉敏明
授業科目区分	特別研究科目		
履修区分	必修	授業形態	演習
配当年次・学期	１年次通年	単位数	４単位

授業の到達目標及びテーマ

本授業では、修士論文及び修士制作に関する指導を面談形式で行いながら、研究テーマの発表、年次制作・研究の発表及び報告書の提出という流れを通じて、修士論文または修士制作に繋げる研究テーマ設定と、そのテーマに基づく制作・研究を行う中で新たな試みや修正を加え、複合的視点に立脚した一定の成果を得るとともに、研究の方向を定めることを目標とする。

授業の概要

本授業は、研究テーマ発表、年次制作・研究発表、報告書の提出という段階から構成され、修了研究・修了制作を行う２年次の特別研究Ⅱに向けた準備段階と位置づけられる。

１年次前期には、入学時に提出された研究計画に基づき担当教員を配置し、その教員が、学生の研究テーマに関連する教員と連携しながら「研究テーマの発表」に向けた指導を行う。

「研究テーマ発表」を終えた後期は、複合芸術実習Ⅰ、Ⅱにおける成果等を踏まえて、研究テーマの内容に基づいた研究指導教員と関連分野の副指導教員が指導に当たる。学生は両指導教員と定期的に研究・制作のテーマや意図、内容や手法に関する相談と進捗状況の報告をしながら、年次制作・研究を完了し、発表を行ったうえで報告書を提出する。

授業計画

通年に渡り、担当教員の指導に基づき研究を行う。研究指導教員の研究テーマは次のとおりである。

（尾登 誠一）機能デザインをベースとした総合的なデザイン論を踏まえて、プロジェクトを企画・立案し、外部組織との連携等を通じて、ソーシャルデザインの成果につなげるための研究指導を行う。

（小田 英之）ビジュアルデザインの視点から社会問題を捉え、絵画やイラストレーション、ＣＧをベースとした視覚メディアを効果的に活用した課題解決に関する研究指導を行う。

（藤　 浩志）立体造形やコミュニティアートなどの表現手法と、文化イベントやアートプロジェクトの実践を踏まえて、対象に応じた表現活動や組織形態、資金計画、広報等、社会と深く接合するアートマネジメントに関する研究指導を行う。

（岩井 成昭）文化背景や地域を問わず、現代において急変する個人の生活や社会課題を題材とする芸術表現の調査・分析をしながらその有様を踏まえ、学生自身の作品制作やプロジェクトを立案、実践していく研究指導を行う。

（今中　隆介）流通を意識したプロダクトデザインやものづくりの知見と、社会を俯瞰するデザイン思考に基づいて、対象とする相手方に応じた制作・提案やプロジェクト運営に必要な体制の組成・実践に関する研究指導を行う。

（志邨　匠子）美術史研究の視点から芸術表現を考察する。資料の収集、客観的な分析、理論的なアプローチ、議論の方法論など、主に美術史・芸術学を基礎においた論文（論考）に関する研究指導を行う。

（岸　　健太）建築及び都市デザインの視点から、地域や企業を含むコミュニティを対象として、地域課題の解決を試みるプロジェクトの具体化に必要なサーベイ手法、多様な組織との交渉、マネジメントなどに関する研究指導を行う。

（飯倉　宏治）芸術表現における情報技術の利活用を研究する。プロジェクトにおける具体的な制作や提案を行う際に必要となる様々な知識の習得のみならず、技術・技法に関する実践的な研究指導を行う。

（萩原　健一）対象物や対象地域に応じた映像表現の複合的な活用を通じて、メディアによる地域・人・事柄をつなぐ可能性を探究し、従来とは異なる地域課題の解決手法や表現領域の拡張に関する研究指導を行う。

（服部　浩之）現在性と公共性を重視し、キュレーションの観点から現代芸術を軸としたプロジェクトの企画設計や運営、公共空間の生成に関する研究指導を行う。文献の読書会、各自の実践の共有をゼミ形式で実施する。

（白杉　悦雄）「なぜ複合の視点が必要なのか」という問いを、学生の皆さんとともに考えていきたい。今期は、H・S・ベッカー『アートワールド』を主として、「集合的行為としてのアート」という切り口から「複合芸術」についてリサーチする。

（唐澤　太輔）夢などのイメージの省察や粘菌などの自然現象の観察を中心に、心理学者・河合隼雄や博物学者・南方熊楠の思想に寄り添いながら、現代アートにおける内的及び外的複合の新たな可能性と理論について研究指導を行う。

（石倉　敏明）フィールドワークに基づく調査の方法論と、人間と非人間からなる様々な行為主体の関係性に基づく現代人類学の知見に基づき、新たな協働の可能性についてリサーチする。

履修上の注意

全体で行う発表などの他は、原則個人指導で行うため、担当教員（前期のみ、研究領域の確定まで）、主・副指導教員（研究テーマ発表以後）とよく相談し授業計画を立てること。

テキスト

授業内で適宜紹介する。

参考書・参考資料等

授業内で適宜紹介する

学生に対する評価

個人指導での評価、研究制作や研究発表など、総合的に判断する。

授業科目名	特別研究Ⅱ	担当教員名	尾登誠一、小田英之、藤浩志、岩井成昭、今中隆介、志邨匠子、岸健太、飯倉宏冶、服部浩之、萩原健一、白杉悦雄、唐澤太輔、石倉敏明
授業科目区分	特別研究科目		
履修区分	必修	授業形態	演習
配当年次・学期	２年次通年	単位数	１０単位

授業の到達目標及びテーマ

本授業では、修士論文及び修士制作に関する指導を面談形式で行いながら、研究指導を担当する主指導教員が副指導教員との複数体制で学生の研究・制作の指導に当たる。

特別研究Ⅰ（1 年次）の中で定めた研究テーマや、取り組んだ年次制作・研究発表、提出した報告書を踏まえて、本授業では、修士研究の構想発表、中間報告・発表、修士論文・修士制作の提出、公開発表会という流れの中で、自らの研究・制作をより発展・深化させ、複合的視点から既存の領域や価値観にとらわれない研究成果として、修士論文または修士制作として結実することを目標とする。

授業の概要

2 年次の本授業では、修士研究構想発表、中間報告を経て、中間発表、修了制作・論文審査をおこなう。前期は修士研究構想発表を行い、研究・制作のテーマを確定し、修了制作、および修士論文のいずれで審査を受けるか確定する。中間報告後は後期の中間発表を経て、公開での修了制作・研究審査ののち、修了制作及び論文発表会をおこなう。指導は研究テーマの内容に基づいた指導教員 1 名と関連分野の副指導教員１名が当たる。履修者は各指導教員と定期的に研究・制作のテーマ、意図及び内容・手法について相談し進捗報告をおこないながら、複合芸術実習等でより精度の高い研究や制作を繰り返し、その成果をもって修了制作・研究の審査・発表に望む。

授業計画

通年に渡り、担当教員の指導に基づき研究を行う。研究指導教員の研究テーマは次のとおりである。

（尾登 誠一）機能デザインをベースとした総合的なデザイン論を踏まえて、プロジェクトを企画・立案し、外部組織との連携等を通じて、ソーシャルデザインの成果につなげるための研究指導を行う。

（小田 英之）ビジュアルデザインの視点から社会問題を捉え、絵画やイラストレーション、ＣＧをベースとした視覚メディアを効果的に活用した課題解決に関する研究指導を行う。

（藤　 浩志）立体造形やコミュニティアートなどの表現手法と、文化イベントやアートプロジェクトの実践を踏まえて、対象に応じた表現活動や組織形態、資金計画、広報等、社会と深く接合するアートマネジメントに関する研究指導を行う。

（岩井 成昭）文化背景や地域を問わず、現代において急変する個人の生活や社会課題を題材とする芸術表現の調査・分析をしながらその有様を踏まえ、学生自身の作品制作やプロジェクトを立案、実践していく研究指導を行う。

（今中 隆介）流通を意識したプロダクトデザインやものづくりの知見と、社会を俯瞰するデザイン思考に基づいて、対象とする相手方に応じた制作・提案やプロジェクト運営に必要な体制の組成・実践に関する研究指導を行う。

（志邨 匠子）美術史研究の視点から芸術表現を考察する。資料の収集、客観的な分析、理論的なアプローチ、議論の方法論など、主に美術史・芸術学を基礎においた論文（論考）に関する研究指導を行う。

（岸　　健太）建築及び都市デザインの視点から、地域や企業を含むコミュニティを対象として、地域課題の解決を試みるプロジェクトの具体化に必要なサーベイ手法、多様な組織との交渉、マネジメントなどに関する研究指導を行う。

（飯倉 宏治）芸術表現における情報技術の利活用を研究する。プロジェクトにおける具体的な制作や提案を行う際に必要となる様々な知識の習得のみならず、技術・技法に関する実践的な研究指導を行う。

（萩原　健一）対象物や対象地域に応じた映像表現の複合的な活用を通じて、メディアによる地域・人・事柄をつなぐ可能性を探究し、従来とは異なる地域課題の解決手法や表現領域の拡張に関する研究指導を行う。

（服部 浩之）現在性と公共性を重視し、キュレーションの観点から現代芸術を軸としたプロジェクトの企画設計や運営、公共空間の生成に関する研究指導を行う。文献の読書会、各自の実践の共有をゼミ形式で実施する。

（白杉 悦雄）「なぜ複合の視点が必要なのか」という問いを、学生の皆さんとともに考えていきたい。今期は、H・S・ベッカー『アートワールド』を主として、「集合的行為としてのアート」という切り口から「複合芸術」についてリサーチする。

（唐澤 太輔）夢などのイメージの省察や粘菌などの自然現象の観察を中心に、心理学者・河合隼雄や博物学者・南方熊楠の思想に寄り添いながら、現代アートにおける内的及び外的複合の新たな可能性と理論について研究指導を行う。

（石倉　敏明）フィールドワークに基づく調査の方法論と、人間と非人間からなる様々な行為主体の関係性に基づく現代人類学の知見に基づき、新たな協働の可能性についてリサーチする。

履修上の注意

全体で行う発表などの他は、原則個人指導で行うため、担当教員（前期のみ、研究領域の確定まで）、主・副指導教員（研究テーマ発表以後）とよく相談し授業計画を立てること。

テキスト

授業内で適宜紹介する。

参考書・参考資料等

授業内で適宜紹介する

学生に対する評価

個人指導での評価、研究制作や研究発表、審査結果など、総合的に判断する。